



ONE'S  
voice  
VOICE.26

インタビュー  
東京芸術劇場芸術監督  
野田秀樹

## 場所が変わると “桜”も変わる

シャイヨー劇場に正式招待され、  
「ジャポニスム2018」の一環として上演された  
『贗作 桜の森の満開の下』。  
『THE BEE』(2014)、『エッグ』(2015)に続き  
3作目となるパリでの反応やいかに。

—— パリ公演は、東京公演と内容は同じはずなのに、ずいぶん印象が異なりました。

野田 空間と観客が違うと、ぜんぜん違ってきますよね。やっている方も成長すると思うか、環境の違いがこんなにも作品を変えるものなのかと思いました。パリの国立シャイヨー劇場は、客席から舞台の床が見える。今回の演出は、ゴム(を引っ張りさまざまなものに見立てる)場面など、床面が見えると、よりおもしろさがはっきりわかるので、それに対するリアクションも大きかったと思います。

—— フランスの観客は、どういうところに反応していると感じましたか。

野田 おそらく、ビジュアル的なところじゃないかな。物語の構造にまで深く入れたかということ、あれだけの情報量とスピードだから、ついていくのは大変だと思う。あとは偶然に入り込んでいたアンドレ・ジイドの『狭き門』とか、『監獄の誕生』とか、僕らが70〜80年代に得たフランス系の文化的なキーワードが出てくると、すごく喜んでましたね。「日本人がこんなに西洋のことを細かく知っているとは！」って(笑)。「監獄の誕生」の部分でも、『狭き門』みたいに「ミシェル・フォーコーがそう言った」って付け加えようかとギリギリまで悩みましたが、他との繋がりが悪くなるのでやめました。入れたら大喜びされたと思うんだけどね。結局、せりふで日本公演と変えた部分はまったくありません。



Photo by Nathalie Vu-Dinh

Photo by Nathalie Vu-Dinh

—— 俳優陣が、努めてせりふをクリアに発声しているのも印象的でした。

野田 観客は字幕を通してせりふを理解するので、俳優が発する言葉にダイレクトには反応しにくいんですね。そのせいで、みんな言葉をしっかり自分の頭の中を通して、丁寧にせりふを言うようになっていた。これは稽古場での状況と似ていて、俳優は観客のリアクションが無いから、極力戯曲に対して忠実に臨むことで、自信を得ようとするんです。日本の客の前では、本番になるとほら、だいたいみんなお調子者だから(笑)、お客さんの反応によって芝居が変わったりするけど、そういうことが無いのがよかったですね。お客さんも、微動だにしないで、集中して観てくれているのがわかりました。

—— 字幕の位置が満開の桜の装置にくい込む低い位置にあり、美観より観客への配慮を優先していましたね。

野田 『One Green Bottle』(『表に出るいっ!』英語版)の韓国公演の時に、字幕が中に入ってくると楽に見られるということがわかったんです。今回は、美術の堀尾幸男さんが、それを許してくれたからできました。ふつう美術家は嫌うんですよね。海外の美術家だったら、絶対にいやだと言う。特に英語圏の美術家は、言葉がわからないということを理解しないから。今回は場面によって位置をずらすなど、相当考えて、細かいことをやっています。それでも、前列の方だと字幕を見上げるので首が疲れると言われたり、いろいろあったけど、休憩後もお客さんの集中力は変わらなかった。二幕になると、急にお客さんはリラックスするんですよね。これは日本でもパリでも同じ。「そうか、こういうことか」という整理ができて、一度落ち着くのかな。『エッグ』は休憩を入れなかったで、一度フォローできなくなると、整理がつかなくなったのかもしれない。

—— 『エッグ』との反応の違いは、大きいものでしたか。

野田 シャイヨー劇場では、『THE BEE』('14)、『エッグ』('15)、『贗作〜』('18)と3作品やりましたが、3つともぜんぜんテイストが違って、それを「前のがよかったのに」とは言わずに、それぞれ喜んでくれました。『エッグ』と『贗作〜』も、(規模は似ているが)だいぶ違うと思う。『贗作〜』は、放射型に世界のイメージが広がっていく話。『エッグ』は、どんどん閉じていく話じゃないかな。最初はスポーツという開かれたもので始まるけど、話が進むにつれて、狭いところに連れて行かれる感じがすると思う。『贗作〜』は、どちらかというイメージがあっちは行ったりこっちへ行ったりするけど、王と権力と芸術家の位置というものについて、考えようと思えば考えることができる。今回も、やり直してみても新たな発見が多数ありました。30年経ってもまだ上演できることが不思議だけど、敢えてテーマを時代性を伴う特定のものに絞らずに書いているから、まだ作品が生きていられるのだと思う。あのころは、書いているうちに、「この辺に着陸するな」という着陸点が見えてきて、急降下してゆく感じで書いていたんですね。今は、わりと着陸点を先に定めている感じ。若い時の書き方の方がおもしろいことができると思うけど、これはしょうがない。老いです(笑)。

—— 基本的にパリは、ロンドンに比べて観客の反応が好意的ですよね。

野田 ロンドンは、言語の世界の中心にある英語を持っているという矜持のようなものがあって、それがイギリスの文化の弱点にもなっていると思う。あれだけ国際都市なのに、たとえば『源氏物語』のことなんか、99.9パーセントの人が知らないし、関心もないでしょう。フランスは、もっと開かれている気がする。王政がなくなって、共和制になったこととも関係があるかもしれませんがね。言語でいえばフランスも、19世紀まではイギリスと植民地を二分して



Photo by Nathalie Vu-Dinh

いたから、英語とフランス語は世界の言語の双壁だったけど、20世紀に入ってアメリカが追随してきたことで、英語に覇権を奪われてしまったという事情がある。と、勝手に思ってるんだけど。

—— マイノリティになったことで、異なる言語の相手にも敬意や興味を抱けると。そんなフランスと、芸術監督として今後はどのような付き合い方をしますか。

野田 欲を張れるなら、これまでのように日本の役者と創ったものをフランスに持っていきのと、フランスの人たちに来てもらって日本で作品を創るものの、両方をやりたいんですけどね。僕の作・演出作品をフランスの俳優とやる? うーん、それをやるとしたら、言葉の問題もあるし、7年くらいかかるかな。ただ、タイで『赤鬼』をやった時に痛感したけど、とにかく人間どうしの結びつきがまず大事。お互いが信頼し合えるようになると、言葉が壁になりにくくなり、共同作業がしやすくなるのは確かです。今回は「ジャポニスム2018」のお陰で大規模な公演ができたし、2020年までは文化予算も増えていくと思うけど、問題は、それを継続させることだと思っています。

取材・文:伊達なつめ  
扉写真:渡部孝弘

### 「贗作 桜の森の満開の下」

2018年9月28日(金)~10月3日(水)

フランス パリ・国立シャイヨー劇場

(ジャン・ヴィラル劇場)

Théâtre National de Chaillot/ Salle Jean Vilar



作・演出:野田秀樹~坂口安吾作品集より~

出演:妻夫木聡 深津絵里 天海祐希 古田新太

秋山菜津子 大倉孝二 藤井隆 村岡希美

門脇麦 池田成志 銀粉蝶 野田秀樹

主催:国際交流基金/国立シャイヨー劇場

東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)/NODA・MAP

### 野田秀樹 HIDEKI NODA

劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。92年に「劇団 夢の遊眠社」を解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。以来『キル』『赤鬼』『ロンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『エッグ』『MIWA』『逆鱗』『足跡姫』『One Green Bottle』など、時代を穿つ話題作を発表。モーツァルト歌劇『フィガロの結婚-庭師は見た!』等、オペラの演出、海外の俳優やスタッフとの共同制作。2017年は9年ぶりとなる、『野田版 桜の森の満開の下』で歌舞伎の脚本、演出を手がけ、大きな反響を得る。演劇界の旗手として枠を超えた精力的な創作活動を行う。2015年よりブラジル、東北、東京、京都などで、国内外の多種多様な表現者達と新たな幻想的な表現を創出する文化サーカス「東京キャラバン」を実施。2017年、十八代目中村勘三郎とのタッグが話題となった伝説的作品『表に出るいっ!』を、『THE BEE』の最強キャストとともに、新たな英国版『One Green Bottle』として創作。東京、韓国、ロンドン、ルーマニアで上演。2018年9月~11月、NODA・MAP第22回公演『贗作 桜の森の満開の下』を東京、大阪、北九州、パリで上演し好評を博す。世界を駆け回り、意欲的に活動を展開している。